

多様な教育的ニーズのある子どもの学びを保障する 授業のためのガイドライン

横須賀市教育委員会では、平成30年度に引き続き、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の地域実践研究に参画しています。昨年度、各学校における校内の教育支援体制の取組の現状を調査した結果、特別支援教育にかかる研修のニーズが高いことがわかりました。

そこで、今年度は、より具体的な研修の場である授業研究に焦点を当て、多様な教育的ニーズのある児童生徒一人一人に対して適切な指導が実現できる授業の在り方をまとめることを研究の目的としました。そして、研究協力校から得られた成果を「多様な教育的ニーズのある子どもの学びを保障する授業のためのガイドライン」としてまとめましたので、自校の校内研究授業等を考える際の参考としてください。



●インクルーシブな学校において実施される授業づくり

これからの授業では、主体的・対話的で深い学びが重要になります。子どもたちの発達の段階や特性、子どもの学習スタイルの多様性や教育的ニーズを踏まえて、教科などの内容、単元（題材）の構成や学習の場面などに応じた方法を選択することが重要です。「教え方」の工夫だけでなく、一人一人の「学び方」も大切にしたい誰にもわかりやすい授業が求められます。

●多層的な支援システム（MTSS:Multi-Tiered System of Supports）

多層的な支援システムとは、MTSS の考えに基づく3層の考え方です。支援の対象を学習面と社会性・行動面について、それぞれを1次的な支援から3つずつ計6つに分けてシステム化し、それぞれのニーズに応じた指導・支援を示したものです。

通常の学級においては、すべての子どもを対象とした1次的な指導・支援の取組における多様な方法を意識することが重要です。学びのユニバーサルデザイン（UDL）等によって、できるだけ多くの子どもが学ぶことができ、わかりやすくチャレンジのある授業や、お互いを認め合う学級経営につながります。

- ・1次的な取組の対象…すべての子ども
- ・2次的な取組の対象…配慮を要する子ども
- ・3次的な取組の対象…集中的な支援の必要な子ども

●学びのユニバーサルデザイン（UDL:Universal Design for Learning ）

授業を考える上で大切にしていきたいことは、学びのユニバーサルデザイン（UDL: Universal Design for Learning の略）の考え方です。UDLは、米国の教育機関Center for Applied Special Technology(CAST)がその開発を担い、「UDLガイドライン」やその関連資料が日本語に翻訳され公開されています。（金子・バーンズ亀山,2011）

子どもたちの学習には、一人一人の脳のつくりの違い、認知機能が大きく影響しています。よって、子どもたちの学び方にも、得意な方法と苦手な方法があるのは当然のことであり、一人一人の脳の違いに着目した上で、その子の学び方に応じて様々なオプションを提供していくという考え方です。

【UDLの3つの視点】

- ① 子ども一人一人が、意欲をもって学習活動に取り組むための工夫があること
- ② 子ども一人一人に、情報や教えた内容をわかりやすく伝えるための工夫があること
- ③ 子ども一人一人が、考えたことやわかっていることを表現・発信するための工夫があること

●学習指導要領より「児童（生徒）の障害の状況等に応じた指導の工夫」【第1章第4の2の（1）のア】

（1）指導内容や指導方法の工夫を行う際に大切にしたい視点

学習指導要領解説：総則編では、「特別支援教育において大切な視点」として、次のように示されています。

特別支援教育において大切な視点は、児童（生徒）一人一人の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等（以下、「障害の状態等」という。）により、学習上又は生活上の困難が異なることに十分留意し、個々の児童（生徒）の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を検討し、適切な指導を行うことであると言える。

（2）障害のある児童生徒などへの配慮事項

学習指導要領解説：各教科編では、障害のある児童生徒などへの配慮事項について次のように示されています。

通常の学級においても、発達障害を含む障害のある児童（生徒）が存在している可能性があることを前提に、全ての教科等において、一人一人の教育的ニーズに応じきめ細かな指導や支援ができるよう、障害種別の指導の工夫のみならず、各教科等の学びの過程において考えられる困難さに対する指導の意図、手立てを明確にすることが重要である。

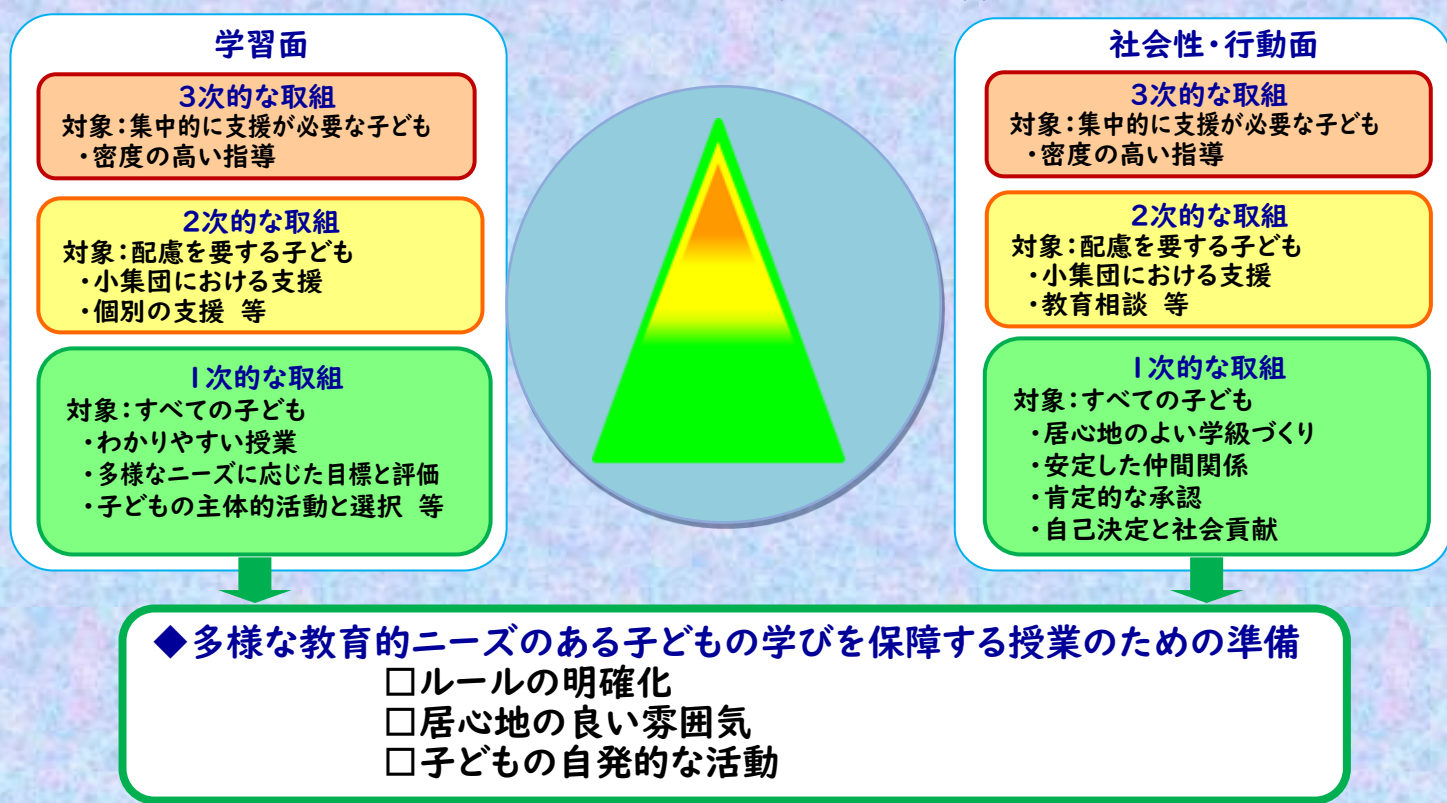
●校内研修（校内研究授業の流れ）

- ① 多様な教育的ニーズのある子どもの学びを保障する授業の在り方に関する研修と授業研究に関する事前意識調査
[「多層的な支援システム（MTSS）」や「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」について学ぶ]
- ② 指導案検討会 [教科等の専門性と本ガイドラインの観点で検討]
- ③ 研究授業
- ④ 授業検討会 [教科等の専門性と本ガイドラインの観点で検討]
- ⑤ 研修（授業研究）に関する事後意識調査

学習指導要領解説の各教科・領域編にある「各教科等における学習上の困難さに応じた指導の工夫の例」も参考にしてください。

※小学校及び中学校学習指導要領解説の総則編及び各教科編には、「各学校において指導計画を作成するに当たり、各教科等の目標と指導内容の関連を十分研究し、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、まとめ方などを工夫したり、内容の重要度や児童の学習の実態に応じてその取扱いに軽重を加えたりして、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導を行うことができるように配慮する」ことが示されておりますが、本研究では、校内研究授業として取り上げる1単位時間の授業を考える際のガイドラインを示しています。

多層的な支援システム Multi-Tiered System of Supports (MTSS)



◆多様な教育的ニーズのある子どもの学びを保障する授業のための準備

□ルールの明確化

＊質問の仕方や意見の伝え方、話し合いの仕方など基本的な授業のルールを決め、授業参加をしやすくします。

□居場所の良い雰囲気 □子どもの自発的な活動

＊学級を、子ども一人一人にとって居心地が良く、豊かな人間関係が形成された集団に育てていくことが重要です。「児童生徒の出番があり、役割がある」「学級を良くしていくための話し合い活動がある」こうした学級活動を丁寧に行うことで、学級集団に、互いの個性を持ち味として認め合える支持的な風土を醸成していきます。

＊整理された教室環境

学校(教室)は、たくさんの刺激であふれています。多くの子どもたちは、その中から「自分に必要な情報」だけを取り出すことができるのですが、それがうまくできない子どももいます。子どもの実態に合わせた環境の調整を行うことが大切です。

・何をどこに置けばよいかわかる環境をつくります。

・生活の見通しがもてる環境をつくります。(先のスケジュールや1日の流れなどの見通し等)

・視覚的・聴覚的に刺激の調整された環境をつくります。

・学習活動の内容に応じた座席の配置や、子どもの教育的ニーズを踏まえた座席の位置を考えます。



◆授業全体の観点

- 全体的な指導、補足的な指導、集中的な指導の展開
- 多様な方法での発信や受信、取り組み方
- 全体指導、グループ学習等の適切な組合せ



はじまり

前時の振り返りや
基礎的な内容の復習

授業の中心

発展的な課題

まとめ

◆前時の振り返りや基礎的な内容の復習

- すべての子どもが解ける問題の設定
- 子どもが授業に集中して取り組める課題の設定

◆授業の中心

- つまづきやすい部分への支援方法の明確化
- すべての子どもが授業のねらいを達成できる工夫

◆発展的な課題

- 理解の状況に応じたチャレンジのある課題
- 多様な課題から子どもが選択する

◆授業全体の観点

- 全体的な指導、補足的な指導、集中的な指導の展開
- * 目標の設定については、本時の授業や単元(題材)で目指している到達目標が明確で焦点化されていることが重要で
- ※子どもの多様な学習ニーズに応じて様々な段階の個別の目標を設定します。
- 多様な方法での発信や受信、取り組み方
- * 教える内容を様々な方法で提示します。
- ※子どもの状況にあった学習の方略(解き方等)を提示します。
- * 学習内容を理解するための教材や教具を工夫します。また、子どもが最大限に学べるように支援機器を活用します。
- * 挿絵、写真、動画、ヒントカードなどを効果的に活用することで、視覚的な手掛かりからも理解できるようにします。
- * 文字の大きさ、色チョークの活用、囲みや下線、矢印、記号など約束を決めておきます。
- * 感覚的に取り入れたことを動作化、作業化させることで理解を深められるようにします。
- 全体指導、グループ学習等の適切な組合せ
- * 子どもたちが、活動的に取り組めるペア学習やグループ学習等を活用します。

◆はじまり

- * 授業のはじめをはっきりさせます。
- * この単元(題材)の流れと本時の目標を明確にします。
- 授業の流れを黒板に示して、活動に見通しを持たせるようにします。
- ※終わりの時間や次にやることが書いてあることで、自分で解決できたり、自分のペースで取り組めたりすることを支援します。

◆前時の振り返りや基礎的な内容の復習

- すべての子どもが解ける問題の設定
- * 既習事項の復習を行い、内容の理解や学習の定着を確認する機会を確保します。
- ※配慮の必要な子どもにも答えられる(解ける)問題を用意しておきます。
- ※既習事項や授業で学んだことを掲示物等で示しておくことで、これまでの授業を想起することができます。
- 子どもが授業に集中して取り組める課題の設定
- * 言葉だけの説明でわかりにくい場合は、イラストや図も使って示します。
- ※日常生活で想起できる場面から問題を作成したり、簡単な整数を使ったりすることで、理解しやすくなります。

◆授業の中心

- つまづきやすい部分への支援方法の明確化
- * ワークシートなど個別の学習を用意します。
- ※子どもの状況に合った補助的な教材や教具を工夫します。(ヒントカード、ルビありとルビなしのプリント等)
- すべての子どもが授業のねらいを達成できる工夫
- * 板書に視覚的な手がかりを用いたり、板書や提示教材と、ノート・プリントを連動させたりします。
- * 見させて、読ませてから、書かせる等、スモールステップで進めます。
- * 子どもたちの積極的な参加を促します。
- ・子どもたちが考えるための時間を確保します。
- ・子どもたちが理由を考えたり、問題解決したりする場面を用意します。
- ・自分に合った考え方や学び方ができるような課題や教材を用意します。
- ※用いる教材や学習の仕方について、子どもたち自身が選択する場面をつくります。
- * 共有化を図ります。
- ・ペア学習やグループ学習など話し合い活動を活用して、学級全体で情報を共有するようにします。
- ※配慮の必要な子どもは、他の子どもの意見を聞くことで理解を深めます。

◆発展的な課題

- 理解の状況に応じたチャレンジのある課題
- * 指示された課題が終わった子どもは、他の子どもに自分の意見や解き方を説明することでより深い理解に到達させます。
- * 子どもの状況に合わせた課題を用意し、取り組ませるようにします。
- ※理解の早い子どもには、発展的な課題や複数の問題に取り組ませ、より深い理解や定着を図ります。
- ※配慮の必要な子どもは、量を減らしたり、方法をかえたりして取り組ませ、内容の理解や定着を図ります。
- 多様な課題から子どもが選択する
- * 個人差を考慮し、別のワークシートを用意し、選択して取り組めるようにします。

◆まとめ

- * それぞれの子どもに対する学習到達度をみます。
- * 子ども同士でお互いの頑張りを認め合う場面をつくります。
- * 子どもが学んだ内容を様々な方法で振り返る時間があります。
- * 授業の終わりをはっきりさせます。

●多様な教育的ニーズのある子どもの学びを保障するためのポイント

※は、2次的な取組

ポイント1: 校内研修による質の向上

「多層的な支援システム(MTSS)」や「学びのユニバーサルデザイン(UDL)」等の考え方を学ぶ機会を設定するなどして、普段の授業で感じている課題を根拠に基づいて整理し、これまでの授業の在り方を再考することが大切です。また、担任を含む教師間において、一人一人の子どもに対する配慮等の必要性について共通理解をするとともに、連携に努める必要があります。そして、すべての子どもにとって充実した学びとなるように、子どもの状況等に応じた適切な指導・支援をしていきます。

ポイント2: 指導案検討会による質の向上

指導案検討会においては、本時の目標を焦点化するとともに、授業の内容と方法がこの授業の目標に合ったものになっているかを十分に検討します。そして、すべての子どもが本時の目標を達成できるように工夫することが大切です。